

## 分科会「この国に生きる女性として」

野寺 恵美

### はじめに

初めまして。日本同盟基督教団の赤羽聖書教会で夫と共に主の働きをさせていただいています野寺恵美と申します。「この国で生きる女性として」、なんと堅苦しいテーマの分科会によくいらっしゃいました。こういうテーマを取り上げるのは、リトリート始まって以来と伺っています。司会者と二人かもと覚悟を決めておりましたので、顔ぶれを見て驚きました。なんとたくさんの女性たちが、しかも若い方々がお集まりくださって。

私は、これまで2年間、「勉強して来なさい」と委員長から出向を命じられ、JEAの社会委員会で学ばせていただきました。社会委員会は「信教の自由」「教会と国家」というテーマを扱う委員会です。天皇の代替わりがありました。憲法改正の動きがまた活発になってきています。今日、こう言う時代に、この国に生きる女性として、どのように生きたらいいのかを、共に学び、共に考え、分かち合い、祈り合っていきたいと思います。

実は私は、信仰を持った若い時には、こういったことを全く考えてきませんでした。イエス様を救い主と信じ、将来を主にお捧げして主に仕えたいと献身した若者でした。先祖崇拝や、葬式、お祭りという敏感に反応して、「絶対しちやダメだ！」と意気込みますが、クリスチャンが日曜日訴訟を起こしたと聞くや「クリスチャンが裁判を起こすなんて証しにならない」と思ったものでした。また勉強でも、私たちは未来に向かって生きるのだから歴史なんて過去のことを学んで何の得があるのかと、歴史には無関心でした。

結婚し、夫が韓国で学びたいというので、私自身は韓国に何の興味もありませんでしたが、ただ妻として夫に従ってついて行ったのですが、そこで衝撃的な話を目にしました。

先の戦争の時、国は天皇を中心にした政策で国をまとめ、国民を戦争に駆り出すために、神社参拝、宮城遥拝、御真影への最敬礼を国民に強制しました。教会でもです。日本の教会はほぼ全てそれに従っていました。でも韓国の一部の教会では、神社参拝は十戒の第一、二戒に違反すると、拒んだ教会がありました。その牧師たちが捕まり、厳しい尋問と拷問の中、屈せずに闘っていました。その中で牧師の妻たちが面会に行きました。その時、多くの妻たちは、「私たちは皆神社を拝み、子供たちも神社を拝む学校に行っているのに、あなただけ何を馬鹿みたいに強情を張っているの。」それまで頑張っていた牧師たちも、妻のこの一言で屈して、神社を拝んでいったそうです。これに対して、朱基徹牧師の妻の呉貞模は、拷問で血と膿にまみれ、枝切のようになっている夫に、「あなたは必ず勝利しなければなりません。生きてここを出ることはできません。」と言ったのです。この言葉に後押しされて、朱基徹牧師は殉教の道を歩んで行きます。その時、何もわからなかった私ですが、とっさに前者のような妻にはなりたくない！！と強く思いました。夫の歩む道が主に従う道であれば、最後まで支えて一緒に歩みたいと思ったのです。どうしたら呉貞模のようになれるだろう

か。大きな課題が与えられました。

### 教会にはびこるサタンの惑わし

#### ・政教分離に対する誤った理解

「教会は政治に口出ししてはならない。政教分離と言うだろう。」よくこんな言葉を聞きます。でもこれは全く間違っています。「政教分離」の意味を履き違えています。これは、もともとあくまでも国が教会（宗教）に介入してはならないことを意味し、教会が国に介入してはならないということではありません。

#### ・善をなすべき国家(為政者)

私たちが属し、そこで生活している「国家」とは何でしょうか。これは「人の立てた」ものです。神が立てたものではありません。国は、民に「益を与えるため」(Rom13:4)、つまり、そこに住む、神の御心に従って善をなそうとする神の民を守り、助けるために存在します。そして、そのために神は人が立てた国家を用いておられます。だから神はこう命じます。「人の立てたすべての制度に、主の故に従いなさい。」(IPt2:13)でも、所詮は人の立てた制度ですから、国家自体が何が善であるのか知りもしないし、生み出すこともできません。神の御旨が何であるのか知る由もありませんから、当然その本来の目的から逸れることも大いにあり得ます。そして、この神の御旨を知っているのは教会です。国家が正しく民を治めるためには、神の御旨を知る教会が、善と悪とを、国に、国を治める為政者に教えなければなりません。ですから、教会は口を閉ざしてはなりません。国の動きに無関心であってはなりません。政教分離だから教会は政治のことに口出ししてはいけない、そんなことを言うてはいられないのです。神の御旨を、神にある善と悪を知っているのは、神からみことばを託されている教会であり、神の民しかいないのですから。悪魔は教会が口を閉ざすよう言ってきます。教会が語らなければ、自分たちの思うままですから。「政教分離だろう。教会は政治について語るな！」と。だから、教会は悪魔に負けてはなりません。神のみことばを、何を為政者はしなければならぬのか、何をしてはいけないのかを、きちんと語り、宣教する必要があります。国民にも教えなければなりません。私たちは何を基準に国の動きを見て、どういう人を為政者に選ばなくてはならぬのかを。教会が口をつぐむ時、してやったりと悪魔はニンマリとほくそ笑んでいるのですから。

### 聖書を見ると

JEA に属する教会の皆さんには同意していただけたと思いますが、私たちが聞き従うべき唯一の基準は聖書です。この聖書は誤りなき神の言葉であると信じています。これが大前提です。人に何と言われようと、ましてや国から何を言われようと、私たちキリスト者は、この聖書に、神のみことばに従う者です。そして聖書にあることが真理なのです。

ですから、何を差し置いてもまず聖書を見ましょう。私たちはこの国に遣わされた者とし

て、何をしなくてはならないでしょうか。

まず、王・祭司・預言者としての働きがあります。私たちキリスト者一人ひとりに、キリストに代わって、王としてこの世を治める働きが委ねられています。だから、そこで悪が行われていたら、またそこに住む民が虐げられていたら、黙って見過ごすわけにはいきません。王として、もっとこうすべきだと発言し、行動していいのです。いや、しなければなりません。この世の王や為政者が民の人権を無視した命令を下す時、私たちは抵抗することができます。これを「抵抗権」と言います。また、祭司として民のために祈る務めが委ねられています。ただ祈ればいいのではありません。祈ってそのまま世から目を背けて、世のことには我関せずではいけません。祈りには爆発的な力(デュナミス)があると聖書は言っています。この力をいただくまで祈り通しましょう。祈ったら見えてきます。祈ったら手が動きます。足が動きます。口が動くのです。そして預言者として、キリストに代わって世に神のことばを語ります。神のことばを語るのは牧師だけがすることではありません。キリストを信じる私たち一人一人が語るのです。教会で聞いたことや聖書を読んで教えられたことを、家庭や学校や職場、地域社会で語ります。時が良くても悪くても語ります。語り続けるのです。

次に、見張り人としての役割があります(Ezk.33:2~6, 33:7~9)。神から委ねられている為政者が正しく国を治めているか、しっかりと見張る役割があります。もし民に危険が迫っているのにそれを知らせなければ、見張り人は罰せられます。しっかり目を見開いて、目を覚まして、世を見張り続けるのです。そして警告を発します。

## 私たちの応答

これらの働きをするには、私たちが今生きている国の上におられる、真の王なる神さまの存在を認めなければできません。この世の王より上におられる神を見ていなければできないのです。イスラエル人が大国エジプトのもとにいた時、「ヘブル人の女に分娩させる時、もしも男の子なら、それを殺さなければならない。」との王の命令に、ヘブル人の助産婦シフラとプアは「神を恐れ」て王の命じた通りにはせず、男の子を生かしました(Ex.1:15-21)。奴隷の身分になっていようと、しっかりと神の声を聴き分け、エジプト王の上におられる神を認め、王より神を恐れた彼女たちは、王命に逆らって、命懸けで幼子を生かしたのです。ペルシャの王妃エステルは、「王に召されないで内庭に入り、王のところに行く者は死刑に処せられる」という法令があるにも関わらず、同胞を救うためにいのちがけで王の内庭に入りました(Esth.4:10-16)。王よりも神を恐れ、隣人の命を助けるという神の使命を自覚した彼女は、命懸けで法令を無視したのです。遊女ラハブは、斥候を差し出せとの王命には従わず、イスラエルの斥候をかくまいました。それこそ命懸けで。自分の国の王を上回るイスラエルの主こそが、天にも地にも唯一の神だ(Josh.2:11)と信じたからです。彼女の頑張りや勇氣ある決断がそうさせたわけではありません。彼女たちの生きていた旧約の時代、女性は数にも入れられないような存在でしたが、神の民としてしっかりとこの役目を果たしたのです。私たちも見倣いましょう。

ですが、これはしんどい働きです。神様から力をいただかなければできません。祈りなし

にはできない働きです。まずは自分自身のために祈りましょう。そして、これらの働きを先頭に立って導いていかなければならない教会の牧師先生のために祈りましょう。

そして、聖書を見る時、これまでの歴史を見る時、これらの行動を支えているのは「信仰」だと言えます。知識がいくらあっても、人格が素晴らしくても、それが正しい行動を生み出すものではありませんでした。信仰、聖霊の助け以外にはないのです。「天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。すばらしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」(Mat.13:45~46)とあるように、天の御国、神が御支配なさる国が全財産を売り払ってでも手に入りたい、一度手にしたら何があっても手放したくない、何にも代えがたい宝だと悟らずしてはなしえないことなのです。主イエスを信じる信仰です。それもその中身、「信仰」の質が問われます。この方こそ世界の真の主権者だと信じる信仰です。この方の前には世の権力も力も無きに等しいものです。この信仰があるからこそ、悪しき権力に立ち向かうことができます。人の努力や勇気がそうさせるものではありません。

この世の中には誤った権力の行使によって苦しんでいる人がいます。声のあげ方も知らずにただ我慢している人たちがいます。その人たちに、聖書にある抵抗権を正しく教えてあげることも、教会の大切な務めではないでしょうか。

また、私は主婦とお年寄りに注目したいのです。時間的な自由さもそうですが、社会的な枠に捉われず自由に物事を考えることができます。「主婦は社会的な常識を知らない」とよく批判されますが、教会的には「社会的な常識を越えた主の常識に生きることができます。以前、教会で原発反対の署名を集めたら、特に積極的に署名してくれたのはお年寄りや婦人でした。現役で大きな企業で働いている壮年は署名しません。九条の会に参加するとお年寄りが主力メンバーです。日本で最初に原水爆禁止運動に立ち上がったのは主婦でした。原爆マグロはもういらないと家族のいのちを守るためです。「9条にノーベル平和賞を！」と働きかけたのも幼い子供を持つママでした。戦争で子供たちに人殺しをさせたくないとの思いから始まった運動です。社会でバリバリ働く壮年だけでなく、主婦やお年寄りにも社会を変える力があるのです。

本来なら、ただ自分の罪に苦しみ、さばきの恐怖に脅え、永遠に滅びる他なかった者が、こうして罪赦され、神の子とされ、永遠のいのちをいただいた者としてこの世に生かされています。この世に生かされている間、私たちはこの国に遣わされた者としてどのように生きていくか、神の御前でもうひとたび考えていきましょう。

最後に、この信仰を端的に表した、朱基徹牧師の説教の一部を紹介します。

「私は今まさに、死に直面しています。…死に直面した私は『死の力に勝たせてください』と祈らずにはいられません。…死の力は、悪魔が人を威嚇する最大の武器だと言えます。死を恐れて義を捨て、死を免れようと信仰を捨てた人がどれほどたくさんいるのでしょうか。…アダムが罪を犯して以来、人はみな死にます。…主のために何百回死んでもかまいませんが、主を捨てたとえ百年、千年生きたとしても、その人生に何の意味があるのでしょうか。この命を惜しんで主を辱めるようなことはありませんように。この身が粉々になろうとも、主の戒めを守ることができますように。主は私のために十字架につけられました。頭にいばらの冠、両手と両足は鉄釘で

打ち抜かれ、最後の一滴まで血を流されました。主が私のために死んでくださったのに、私がどうして死が恐ろしくて主を知らぬふりができるのでしょうか。ただ一死覚悟があるだけです。十字架で死んで三日後によみがえられた主、死の力に打ち勝たれたイエスよ。私も復活を信じて死の力を私の足の下に踏ませてください。…私はよみがえられたイエスを信じ、私もよみがえるのです。…私は私の主以外の他の神々の前にひざまずいて生きることはできません。汚れて生きるより、むしろ死んで主に対して貞節を守ろうと思います。主に従い、わが主に従って死ぬことが、私の願いです。私には一死覚悟があるだけです。」